

3 家政学固有の特性

(1) 家政学に固有な視点

家政学は「人間生活における人と環境との相互作用」を対象としている。本来「人」も「環境」も静止している物ではなく、「人」と「人」、「人」と「物」、「人」とそれを取り巻く「環境」とが相互に複雑に関連しながら変動している。「人」は、生まれ、育ち、学び、仕事をし、遊び、創り、次世代を育て、命がつきるまで社会の中で生きる。総ての人が社会の最小単位である生活の場を形成し、地球環境や社会環境と共生しながら人間として自立して生きていくための具体的な方策を研究し、提案する学問分野が家政学である。その固有の視点は、次の2つにまとめられる。

① 研究対象が常に変動する。

家政学が研究の対象とする人間の生活は、刻一刻と変化する生命体としての生活であり、時代の変化や社会状況の変化とも相互に関連しながら、各ライフステージを生き抜く、変化に富んだ生活である。

時代の変化との関連でいえば、戦後で物資の乏しかった家政学創成期においては、生活の豊かさの実現のために、いかに新しい技術を取り入れ、使いこなすかということが重要な課題であった。その後、大衆消費社会の定着以降は、それまでのように不足する物をどのように補って合理的に生活の質の向上を図るかといった問題ではなく、どのように自己の生活を規定し、選んでいくかが問題となった。そして今日、物質的豊かさが必ずしも生活の豊かさを意味しないこと、経済社会優位の時代変化が生活する人間の生活の質を充実させてこなかったことが明らかになる中で、家政学においては、新しい科学の進歩によって次々に生み出される技術を、経済性、効率性、利便性といった社会経済的尺度だけではなく、精神的・情緒的な充足感、芸術的・美的満足感等の人間の本質に根ざした生活の尺度にも照らして評価し、そのもとで適切に選択することが重要視されるようになった。

② 人の視点でより良い生活を実現する。

「生活の質の向上と人類の福祉への貢献」は諸科学共通の目的であるが、家政学はそれを生活者の視点で発想し、個人、家族、コミュニティのよりよい生活の実現を通して達成しようとする点に固有の視点をもつ。すなわち、個人、家族、コミュニティを中心に据えて、生活する間に生じる問題を生活者が自ら見出し、解決し、よりよい生活に向かうための環境を形成する能力の開発を支援し、個人、家族、コミュニティの福祉の視点から質の高い生活を具現化するような生活環境のありようを提案する。そのことを通じて、人間の生活基盤の安定的・持続的な向上に寄与することを目指すものである。

設立当初、家政学は家族や家庭に関する学問であったが、個人や家族の行う活動、選択、優先事項は家庭内部に留まらず、より広く地域や地球規模のコミュニティを含むすべてのレベルに影響を及ぼすということが理解されるにつれ、次第にその研究対象をより広い生活環境全般へと拡大している。

（２）方法論における独自性

家政学の体系を為す研究領域は、食物領域、被服領域、住居領域、児童領域、家庭経営領域と広範であり、さらにそれらに隣接するまたは基礎となる人文・自然科学の多くの諸科学の存在がある。多様な側面をもつ生活を考察し提案することを目的にしている家政学は、多種多様な学問分野の発展と連動して進化しながら、独自性を確立してきている。

このように様々な学問分野からの知見を取り入れ、生活を構成する各要素間の関係性を踏まえ、全体の脈絡の中で課題をとらえることは家政学の強みである。そのためには、常に関連する学問領域での最新の研究成果を熟知し、会得した上で取り入れることが必要となる。総合的視点をもつ家政学を特徴づける方法論の独自性として、学際的方法と実践的方法とがあげられる。

①学際的方法

自然科学だけでなく、社会科学、人文科学との学際的研究を推進することで、既成の学問を超えた独自の学問を形成している。

家政学が対象とする生活、および、それをとりまく環境は、人間を含む自然と人間がつくる社会と両者から成り立っているということに拠り、家政学の研究方法は必然的に自然科学、人文科学、社会科学の融合となる。たとえば、食物領域、被服領域、住居領域、家庭経営領域のいずれをとっても、複数の科学・学問の協同作業なしには問題自体の解明が不可能である。家政学は、複数のわたる領域の研究を人の視点によって統一することによって成り立ち組立てられた科学であり、その研究成果は人がよりよく生きるという中核的理念に収斂される。

②実践的方法

実践的研究方法は、よりよい生活を実現しようとする家政学の研究方法として重要である。このアプローチによって家政学の研究は現実には貢献しうる生きた理論となり、その結果をもって現実を改造し変革する機能を発揮することになる。

家政学の諸研究が、教育を含む実践的な活動に生かされ、社会的実践課題の解明へと結びついていくことによって、家庭や地域の生活の向上に寄与することができる。家政学はこれらの方法を活用しながら、人の暮らしに関する多くの知見を明らかにし、具体的な諸課題を解決してきた。それらは家政学の歴史を繙けば明らかである。

（３）家政学の役割

生活を総体的に認識し、人と環境に関連する多様な分野での研究成果を活かしながら人と環境との俯瞰的研究をする家政学の総合性は、最適で持続可能な生活を達成するという目的と相まって、社会の多くの側面に影響を与える可能性をもつ。家政学の研究による成果が他の諸科学にも応用され、広く実践されることは、社会全体の生活の質の向上に寄与することになる。このような家政学の役割は、次の３つにまとめられる。

①生活の質の向上を目指す実践と提言

人間はその周辺にある環境・物・人と関わりながら生活を営んでいる。より質の高い

生活を求めていくためにどのように生活を選び組み立てるかは、人間が生きる上での最も大切な意志決定の一つである。社会は、人間生活の集合体であり、個々の生活がその社会の基盤であることから、個人や家庭がいかに関生活営んでいくかは社会の質を左右する大きな要因である。現代社会の急速な変化による混沌とした状況の中で、生活は多様化し、多くの人が共有できる生活の価値も曖昧であるが、こういう時代だからこそ人間生活の向上・福祉に寄与する総合科学としての家政学の重要性はますます大きい。

家政学を学修することにより、生活に関する新しい知見と提言を発信する力を身につけることが可能となる。生活の質に関する家政学の研究成果は、日常生活はもとより、企業、行政などの活動に生かすことが出来る。こうした研究と活動の積み重ねによって人の生活がよりよくなると共に、健康、安全、快適、平等、創造といった生活の価値観が社会に広まっていく。

② 教育と福祉の向上への貢献

家政学を学修することは、福祉を向上させ、快適な生活の実現、及び持続可能な将来を創り出すことを促進する教育や社会的活動の展開を支援することに繋がる。家政学の諸研究は、次世代が将来の生活の選択や生活能力を習得するための教育として、学校教育における家庭科教育、生涯学習を含む多様なかたちの教育として具現化される。それは、現在の生活をよくすることだけでなく、将来を見通して目指すべき生活像を明らかにし、それを実現させるための能力を獲得する科学と文化に裏打ちされた教育の実践である。家政学は次世代の育成に大いなる貢献をしている。また、他者の生活支援のための専門家（職）の養成、及び、福祉を向上させ、快適な生活の実現、及び持続可能な将来を創り出すことを促進する政策形成への寄与等は、家政学の研究成果の実践を通じて達成される。このことは家政学の社会的使命として重要である。

③ 快適な生活と持続可能な将来の実現

家政学の研究は、何をもって生活の向上というのか、よりよい生活実現のために何が必要かを常に検討・吟味し、生活する人の力量を向上させ、主体的生き方を実現するために行われる。ライフスタイルが多様化し、社会構造が複雑化するに伴って、生活に関わる様々な問題が顕在化している。それらは、一つの原因に対する一つの答えという因果関係のもとではなく、生活という総合性の脈絡の中で解決への糸口が発見される。家政学専門家による生活困難者の支援、消費者問題、高齢化や少子化による問題、震災後の生活再建などへのアプローチはその一例である。